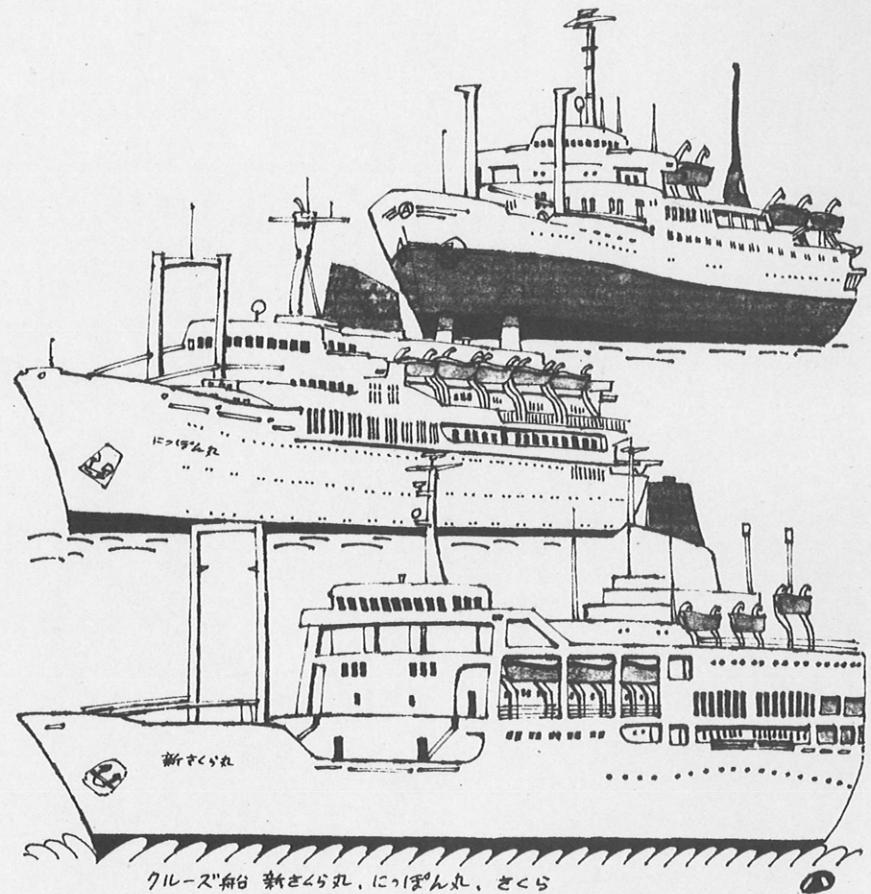


月刊・ブルーアンカー

Blue Anchor



クルース"船台 新さくら丸、にっぽん丸、さくら

海文堂書店 1982・2【1】

〒650 神戸市中央区元町通3-5-10
(電) 078-331-6501

目

次

邂逅——「古典愛読」の周辺——	木山
『良い顧客が、良い本屋をつくる』	木山
最近の面白本から	書香家之蕃
よみがえる読書経験	植村達男
船と私	佐高信
N	藤原裕
郷土誌の窓	
海文堂案内板	

18 14 12 9 7 4 2

邂逅

「古典愛読」の周辺

木山 蕃

哲学が具体的に披露される。
著者ほどの洞察力もまた感激もなく、だけれど、著者の読み方にも似て好きなように書物に接して来たわたしには、ページを繰るごとに共感がある。

「冬祭り」の感想を載せてもらつた「読書アラカルテ」の取持つ縁で、思いがけず秦恒平氏から丁重な書信と「初恋」を頂戴した。

その少し前に著者に惹かれて、近刊の「古典愛読」を読み終えたところだった。

「古典愛読」は、この種の案内書がもつ教科書臭が無く、著者と対話の雰囲気がある。著者の趣味を思わせる章名の、一字一句、歓喜咲楽、一期一会、断絶平家、一知半解の五章に分れて、古典の読書体験が語られ、「一見恣意的にみえながら読書子一人一人の素質と語感とにして数多い読書のさまざまな感銘が、深く契合し、融和してその人なりの「愛読」のあとを証していく」というのが、むしろ古来「読書」という営みの本筋」との読書

例えば、著者は古事記に対し「みとまぐはい」を引く。わたしには高校時代同じ岩波文庫で、倭建ノ命が美夜受比売に詠みかけた「……襲の欄に、月立ちにけり」の「月」におどろいて、以来古事記が親しいものになつた体験が重なるのだ。

さらに、「冬祭り」一巻の愛読で云々できることではないが、古典愛読と言條この書は、秦文学の恰好の手引きもしております。逆説すれば、秦文学が古典、伝統への誘いをなしているともいえるようだ。巻末の書目を見ながら、この著者の一冊一冊を読み進みたい思いにかられた。

近年正月休みに師匠の歌集を読初めするのを例にしているが、来年のそれは「初恋」にしようと、包装紙でカバーをつけて机辺にひとまずおいていた。が、歳末といえ休日前夜少し気分がのんびりすると、誘引拒みがた大きな喜びである。井伏鱒二と石川淳作品の一部しか現代小説になじみがなかつたわたしには、「冬祭り」に邂逅の機縁がありがたかった。

出版・書店からいえば、映像とタイアップし文庫版まで用意してベストセラーづくりを図る販売の論理があるが、それは将来への展望を欠いた寂しい商業でないか。また、岩波文庫、日本古典全集など文庫版の「神聖性」信者の残党には、書店の中心部にせり出した文庫コーナーは神樂殿がストリップ劇場に改築された趣に見える。わたしはお神楽もストリップも好きだから、それはそれでいいのだけれど、一作家一冊の自信作コーナー——旧刊、新刊を通じて作者自選の著書一冊、できれば署名本を常備(ということは出版社にも自社から送り出した著書・著者への愛情と責任が必要)したコーナー、いうなれば読者へ作品との邂逅を誘う場が用意されてもよいのではないか。新装開店の海文堂さん、どうでしよう。

「完本宮格二全歌集」後記に「新しい歌集が編まれて発っていくとき、その歌集は愛読者との邂逅を瑞々しく夢みるものである」という件があるが、それは読者の側に立つても愛読する一本、一人の作家に邂逅することは、さもある。

古美術店の前で、「嵐山八仙」に「ころばせ」と雪子が弦くと、倭名類聚抄の「久呂波世」とは、など、乏しい知識を揃つて問い合わせたいような、道草を食う楽しさもある。

「完本宮格二全歌集」後記に「新しい歌集が編まれて発っていくとき、その歌集は愛読者との邂逅を瑞々しく夢みるものである」という件があるが、それは読者の側に立つても愛読する一本、一人の作家に邂逅することは、

引用書目・秦恒平「冬祭り」講談社。同「初恋」同。
同「古典愛読」中公新書。幸田成友校訂「古事記」
岩波文庫。「完本宮格二全歌集」立風書房。

『良い顧客が、良い本屋をつくる』

書香家之

このあいだ長男が結婚、別世帯になるので荷造りをしていた。パッキンケースにして、10函余りも本があったらうか。

「僕の財産は、本とカメラだ」と親爺を喜ばすコトバを吐いてくれたのだが、その中味となれば量的にはこれまで80%がハウツウものと判じられた。

工学部を出て、商社勤めをした息子にとって、対人関係や経営常識ものなど、在学中の空白を急いで埋めようとした意気込みは喜んでやれるが、出版業界で永年生きてきた親から見れば、このラインアップでは何か物足りない気がしてならない。

親爺である私の本棚には息子のラインアップとは反対にハードカバーが中心で、慣習的に各年代の戦後の名著

といわれたものが少しづつ顔を揃えている。しかし、改めて考えてみると、「その本を全部読んだのか」と吃問されるといささか返事に窮する。

実務書のなかには、赤・青エンピツや近頃はやりのマーカーペンで汚れ、口取り紙で章見出しもあり、書き込み用紙が貼込んだものもあるにはあるが、このように読みこんだ本は折り数えられるほどしかない。

息子の購入基準は、いま欲しいからであり、親爺のそれは、このさき参考になるであろうから、いま買つておこうの違いであった。

年間読書リストをつけていた当の息子は、10冊に1冊ぐらい読み返したいものがあつたと述懐しているところをみると、ハウツウものであつても読まないよりは、読んでくれて良かったと思う。そのうち、追いつめられてじっくりと読み込む本を買うだろう。

ついでにいえば、子供のコミックも満更捨てたものではない。悪いのはTVだ。それも、本を読む人がたまにTVを見るのは視点が変つてまた良いものだが、本を読まない人のTVべつたりは一番困る。

人間に平等に与えられた時間を食いものにし、視角をブラウン管サイズにする悪魔がTVだ。と思うのは私の偏見だろうか。

欲しい本が手に入らないというコトバをよく聞く。それが、どんな本かは知らないが、出版流通在庫が30万点もあり、毎年3万点以上の新刊が出る日本の現況で、全部揃えた本屋を作ろうとする一、二〇〇坪（四、九五〇坪）くらいの売場面積がいる。これとて静態的にみた展示であり、動態的には例え、たまたま昨日売れた本を別の顧客が今日買いに行っても直ぐ手に入らず、東京で補充され再び棚に並ぶまでには2~3週間かかるのである。

『西遊記』は、中国の僧・玄奘法師が三つの教典（三蔵）を手に入れるため、幾多の困難を克服しながら天竺まで旅をし、それを持帰る話である。

僧侶としての玄奘さえ、その教典があることを教えられて初めて知った。その情報を得ても天竺という場所が具体的に判らなかった。三人の弟子の手助けを得て、81

の大難と闘うなど、自分の入手したいと書ったものを手に入れるためにたいへん苦労していることを良く判らせてくれる。

われわれ現代人が、欲しいと思っている本の情報と、実体の本との間には、大きくわけて二つの相対的な条件のズレがある。時間的なズレと場所のズレである。

前者のズレは、いつ何によつて知り、いつその本が出版されており、いつ本屋へ行ったかの間で生じる。後者は、その本にふさわしい本屋で探したのかどうかのズレである。

情報・本・時間・人・場所と「5W1H」とをからみ合わせ、読者の側からみた、欲しい本を手に入れる「行動モデル」を構築すべく、3年越しに頑張っているが、力不足でまだ継まらない。ここまできたならいつそのこと、「パソコン」をものにしてから本格的にとりかかりたいと念じている。

五つの要因のうち、場所すなわち「ふさわしい本屋」について紙幅の許される限りふれておこう。

30万点の流通在庫のうちから、いかによりすぐつ

て棚を整えたうえ、新たに刊行されるものからどの本を棚の味付けをするため付加していくかが本屋の特色・顔であり、それが質の水準でもある。

良い本を作らる 書籍文庫

たくさんの本屋の中には、物量に流されるあまり顧客から見離されていくスーパーマーケットのように、営利志向でありながら結局は永続的な営利と固定客を得られぬ本屋が多い。

どの企業でも同じように経営者の経営理念が総ての根源である。環境変化に対応しながらどんな客層を選び、その顧客ニーズの満足充足実現に努力することである。

幸いにして、新しい棚の海文堂が誕生した。棚は生きるものであるから、経営理念が棚に具現できるまでには、従業員諸君が死にもの狂いの努力をされても早くとも半年の歳月はかかるであろう。選ばれた顧客の一員として辛抱し、見守ってあげようと思う。

良い読者が、良い著者を育ててきたように、コミュニケーションで良い本屋をつくるのは、良い顧客自身である。と私は信じている。

最近の面白本から

植村達男

(和五六年発行)

志度藤雄 「一料理人として——神戸・パリ・ロン

ドン・銀座——」(文化出版局)

城山三郎 「わたしの情報日記」(集英社)

上坂冬子 「職場の群像」(中公文庫)

村岡 實 「日本のホテル小史」(中公新書)

山下竹二 「外人投資家」(日経新書)

梁石日 「狂躁曲」(筑摩書房)

織田正吉 「暮しの中のユーモア」(創元社)

山口瞳 「青雲の志について」(集英社文庫)

大岡昇平 「ザルツブルグの小枝」(昭和五三年・中公文庫)

大岡昇平 「わが文学生活」(中公文庫)

加太こうじ 「東京の原像」(昭和五五年・講談社文庫)

加藤秀俊 「アメリカの小さな町から」(昭和五二年・朝日新聞社)

昨年一年間に、私が読んだ本で面白いものを二〇冊挙げると次のようになる。(順不同、年号のないものは昭和)。
「穀物メジャー」の方は力作ではあるとは思うが、別本を読むのに急がしく、半月以上も読みさしのままである。

去年一年間に、私が読んだ本で面白いものを二〇冊挙げると次のようになる。(順不同、年号のないものは昭和)。

サ ガ ン 「ブ ラ ー ム ス は お 好 き」 (昭 和 三 六 年・

新潮文庫)

廓 正 子 「まるく、まるく桂枝雀」 (サンケイ

出版)

多 田 道 太 郎 / 安 田 武 「関 西・谷 崎 潤 一 郎 に そ う て」

(ちくま まぶつくす)

二 木 紘 三 「国際語の歴史と思想」 (毎日選書)

三 島 由 紀 夫 「午 後 の 夜 航」 (昭 和 四 三 年・新潮文庫)

本 田 靖 春 「ニ ュ ー ヨ ー ク の 日 本 人」 (講談社文庫)

猿 谷 要 「ア メ リ カ 南 部 の 旅」 (昭 和 五 四 年・岩

波 新 書)

ここにあげた二〇冊のうちで、最も「隠れた逸材的な本」は最初にあげた「一料理人として」である。著者は執筆当時(昭和五六年)八歳になるフランス料理のコックで、十四歳のとき香川県からコックになるために神戸へ来た。神戸で丁稚をやつたあとロンドンへ密航し、その後パリで修業して本場のフランス料理を学んだ。戦後は銀座「花の木」や「四季」の名シェフとして知られた、フランス料理の第一人者である。

この本を私が面白いと思うのは、このような料理人としての波乱に満ちた体験もさることながら、この人の眼が確実にとらえた権威ある人々の人物像である。

戦前パリ在住時、藤田嗣司や東郷青児が、著者の勤める料理店へ顔をみせた。ところが「わたしは(東郷青児に)好意をもてなかつた」(一一七ページ)という。その理由は東郷青児は無錢飲食の常習であったとか、礼儀知らずの非常識人(二五九ページ以下)であつたからだという。著者は代金の代りに絵を渡すといった東郷青児に対し「あんな首のヒヨロ長い変てこな絵なんかどうでもいいから、早く借金を払って下さいよ」とタンカを切つたこともあるそうだ。(これは戦後の話)

昭和十三年、著者はパリから当時ロンドンへ渡り日本大使館のコックとなる。この当時の外務官僚を次のように評している。「日本の外務省の連中は試験だけで、トコロテン式に上司になつたり、引き手とか親の威光で出世するやつが多い。そんなやつが威張りちらして、料理人とか運転手とかガードマンとかいうものを、まるきり人間として認めない」

よみがえる読書経験

佐 高 信

「経済小説」という、「社会科学」と「文学」の間のような、まぎらわしいものの評論や解説を書いていると、「文学」プロパーの人から、思いもかけぬ反論を受けたりすることがある。

それは、類型化していく「人間」がよく描けていない「経済小説」について、点数が甘すぎるのではないか、というものである。

「経済小説」という名の大衆小説を書いている人の中には、エラそうな顔をしてハイゲイしているかに見える純文学の作家や評論家に対する屈折した感情があるから、私の解説や評論の中にも、いわゆる「純文学」批判が時々顔を出す。

それが、純文学系の人にはお気に召さぬらしいのである。

しかし、そもそも、経済小説という一種の社会小説が

流行してきた背景には、純文学が「性」とかナントカ、人間の内部のササイなことにしか目を向けなくなり、非常につまらなくなつたことがある。

一言で言えば、「組織の中の人間」、あるいは「社会の中の人間」が、ほとんど描かれなくなつてしまつたのである。

「経済小説」の「経済」にアクセントをおくか、「小説」にアクセントをおくか――。

「文学者」は、やはり「小説」にアクセントをおくのだろうが、法律や政治に興味があつて、「経済」にアクセントをつけたい私とは、そこで、どうしても食い違ひが出てくる。

大学では「国文学」を専攻しながら、その後、私と同じように経済経営誌の編集に携つてきた友人と、それについて話していて、「そうだ、ムカシ、これと似たような論争を追つたことがあつた」ということを思い出した。

遠山茂樹らの『昭和史』(岩波新書)に対し、「人間不在」という批判を亀井勝一郎が放つたことから始ま

った、いわゆる「『昭和史』論争」である。

それで、正月に帰省したのを機に、本棚から、大学時代に読んだ亀井の『現代史の課題』(中央公論社、昭和三十二年刊)を取り出した。

私は、基本的には、「役割」としての天皇や首相を、その時代の中で捉える遠山ら、歴史学者の側に立ちながら、赤線のたくさん引いてある亀井の言葉に、改めて共感することが多かつた。

たとえば――。

「歴史家とは共感の苦惱に生きることだ」など。「現代史をつらぬく根幹は、日本の対中国関係ではなかろうか」というのも、鋭い洞察だと思うが、「歴史教育」について、「教科書を国定にすることには反対である」と断言し、「生徒の前で途方にくれるやうな授業ぶりだけが価値がある」と指摘しているのも卓見だろう。それを言う人が、自分たちだけの「専売特許」のように持ち出したがる「民族的自信」や「愛国心」についても、

「私は民族的自信や愛国心を尊いと思ふが、それは歴

史とか古典とかを学んだ結果として自然に出てくること

で、学ぶ前に言ひ出すべき筋合のものではあるまい。歴史を学んで、國を愛する心と同じ程度に、國を憎む心が湧いてくる場合もある。

人間の歴史を読んで、人間にあいそをつかす人間が出てきてもいいではないか

と、まことに正当に指摘している。

あまりに「文学的」「抽象的」な言葉づかいのところもあるが、それは「迷い」とか「共感」とか、主体の側に立つて発言しているからで、オノレの血の通わない「客觀性」の側に立つていなかつてある。

しかし、問題は、また、ここから出でてくる。「主体」というか、「自分」の側から出発すると、「社会」とか「時代」とかに規制される「自分」という側面が脱げ落ちがちになるのである。そこに、どう橋を架けるか。

暮れの四日間、五味川純平の『戦争と人間』の映画を、深夜に熱中して見て、いろいろ考えさせられることがあつた。

数字という「客觀的条件」を、精神という「主体性」

だけで、どこまで克服できるか。

戦争中の天皇の役割と、そこから生ずる責任にしても、二、三のことがらを挙げて、「天皇は本当は平和主義者だった」と言つてしまつていいのか。

あるいは、近衛文麿が、食べものは何が好きで、どうしたとかの「個性」を描けば、「人間」を描いたことになるのか――。

成功しているとは言いがたいが、「経済小説」は、「個性」と「客觀的条件」を共に描こうとする試みではあるのである。

船と私

藤原 裕

船と私のつきあいは、長い。中学2年の時、相生市にある播磨造船・現在の石川島播磨重工業 相生工場で三光汽船の貨物船『陽光丸』の進水式を見たのが、船との出会いのはじまりである。進水の光景と食糧事情も悪かった折、当日の記念レセプションで、私にとっては生れてはじめて口にするご馳走の数々が潜在意識となり私の心中に、船への愛着心を育んだのかもしれません。

現在、私は各種の船舶愛好団体の会員ですが、船のかかわり方は、百人百様で、船旅を愛する人、船に関係あるコレクションを楽しむ人、船のエンジンの話となるとエンジンのかかる人、モデルシップを建造する人等、本当にいろんな形で船を楽しんでおられます。

私は港逍遙派として、神戸港で船との出会いを楽しんでおります。ポートアイランドの荷役施設もほぼ完成し、

六甲アイランドも一部供用を開始し、神戸港の港域は拡大を続けておりますが、私は第一突堤から第八突堤までの新港突堤、摩耶大橋を渡った摩耶埠頭を中心に船を見ながら歩き回っております。

川崎重工や三菱重工で進水風景を眺めた船が停泊しているたりすると、本当に旧友に会ったような気持になり、進水当日の雲の動き、風の感触まで思い出されます。しかし、コンテナー化が急速に進み、いまや日本—南アフリカ航路にもフルコンテナー船が就航し、一方、経済性最優先の思想で建造された多目的貨物船が多数就航して、美しい船影の在来貨物船が徐々に姿を消しつつあるのは時代の流れとはいえ寂しいことです。在来貨物船は船主毎にそれぞれ個性がありましたが、最近の船はずんぐりむづくり型の船が多く、およそ美とは縁遠いスタイルになっております。美しく、機能性、経済性に富んだ船を建造できないものでしようか。

それでも、港を歩いていると美しいスタイルの船に出会うことがあります。東南アジアの諸国の船会社が、欧洲船主から多くの中古船を買船し、配船しております。

船に近よって見ると、前の古い名前や船籍港が読みとれます。私は、これらの船の写真を写しております。天候や時間的制約で撮影は思うにまかせませんが、こつこつと続けようと思つております。

それから私の好きなことに、観光客船の訪船があります。ポートターミナルからギャングウエイを渡ると全くの別世界。くまなく船を見て回ります。一流のデザイナーによる装飾、すぐれた意匠の調度、世界の銘酒を集めたバー、豪華なレストラン、流麗なダンスバンド、本邦未公開の新しい映画、そしてこころよい微笑。どの船を訪ねても、何回訪ねても満たされた気持になります。昨年2月に入港したオランダの客船『ロッテルダム』は私が最も好きな船ですが、知りあったFさんは、昨年で十

の大型客船をフランスで建造中、近い将来、世界一周クルーズで神戸を訪れる日もあるうと今から楽しみにしております。

そのほか、船にかかる趣味として、私は船の切手、船の絵はがきを集めております。世界の国々から、小さなボートから、帆船・貨物船・客船・タンカー、軍艦まで多種多様な船をモチーフにした切手が発行されております。わが国にもなじみの深い『クイーン・エリザベスII』は、さすがに現代を代表する客船の貫禄で十枚を超す種類の切手が発行されており、人気のほどがしのばれます。小さな紙片の中にまとめられた船の姿は、大変美しいものが多く、折にふれ切手の船隊を楽しく眺めております。

つぎに絵はがきのコレクションですが、私のコレクションは進水記念の絵はがきと世界の客船の絵はがきが中心です。進水記念の絵はがきは、ご存知の方も多いと思いますが、船が進水する日に造船所が記念に作られるもので、その船にゆかりのある情景を描いた表紙の絵とともに大変興味あるものです。波や雲の描写にも写真とは

違った趣があり、私の好きなものです。造船不況のためか、この絵はがきの作成を中止された造船所もあり、ファンとして残念なことです。

以上、船と私のかかわりを二、三記しましたが、船についてはどうなことも大変興味をもっておりまます。新聞を読んでいても、船という字がぱっと目にできます。船が私の中で大きな部分を占めています。

船の趣味を通じて、内外に多くの親しい友人、知人ができました。はるばる我が家を訪ねてくれる人もおります。神戸に入港すると、船へ来るようになると電話をくれる船長もおります。家族の誕生日にカードとプレゼントを送つてくれる人もおります。数あるさまざまな船の中で、

多くの人の豊かな表情――

FRIENDSHIP こそ、私が生涯の宝として一番大切にしているのがSHIPです。

12月の開店間もないころ、長田区にある太陽出版の桜井幡雄さんから「いい本ですかから置いていただけませんか」と、一冊の本を預かった。郷土史関係の本を書いておられる有井基さんの編集・発行による『兵庫の伝説』（八〇〇円）という本だ。

兵庫の伝説に関する本は、僕が知っているだけでもかなりある。地域毎にまとめられているものも多いし、

『民話』と名のついた書目も過去数多く発行されている。未来社の『兵庫の民話』や角川書店の『兵庫の伝説』などは今も手に入るポピュラーな本だが、学校厚生会の『民話シリーズ』などは絶版となってしまったようだ。たくさんの伝説の本が書かれてきたのに、今、何故有井さんがこの本を発行されたのか。それは、二、三編読んで、すぐわかった。『あとがき』にも触れておられるが、「大人向けの読み物」としての伝説・民話の本がないということに原因があるようだ。学校厚生会の『民

話シリーズ』も、神戸新聞明石総局編の『あかし昔ばなし』なども小学生から中学生までを対象にした本で、読んで食い足りないものが残るのは止むを得ない。その点、

有井さんの『兵庫の伝説』は、内容の上でも、文章と心理描写の点でも、大人が読んで充分に楽しめる。長く読みみがれることを期待したい一冊だ。

※ ※ ※
話の論文は次の通り。

○神戸市域における警察署の返還（草山 厳）

○福沢諭吉と神戸（成田 謙吉）

○神戸の外人墓地（阪上栄太郎）

○神戸有料道路物語（三）（神生秋夫）

他に、△研究ノートとして「ヒヨーネ・アンド・オ

ーサカ・ヘラルド（11）」が二〇ページにわたって掲載され、その後に、△文献紹介が続く。この号には、『兵庫北関入船納帳』『有馬温泉史料・上巻』『神戸と基督教』『新史流（特輯・神戸に於ける米騒動）』の四点が紹介されている。前の二点は既にこの誌上で紹介しているが、後の二点は初見である。『神戸と基督教』はかつて新聞紙上に取りあげられていましたように記憶している。吉野丈夫著、神戸伝導百年史刊行会刊、昭和五十年発行。『新史流』は、法政大学社会学部歴史学研究会で一九五四年十二月刊。『文献紹介』の文章によると「本書は実証的な方法により、事件の背景を深く探究するとともに、騒動の過程も事件関係者の証言をまじえて叙述している。やや図式的な点もないではないが、広い視野

神戸を見直すのに、この「神戸の歴史」は一つの材料を提供してくれることだろう。

ポートピアの喧騒も遠のいていくこの頃、あらためて親友、詩人竹中郁をみると可であろう」とある。今は、つとに有名なお二人の二十代の「みなどの祭り」はいつたいどんなだったろうと思う。

「シルクハットの男の横顔にフランス留学と共にした親友、詩人竹中郁をみると可であろう」とある。今は、つとに有名なお二人の二十代の「みなどの祭り」はいつたいどんなだったろうと思う。

ポートピアの喧騒も遠のいていくこの頃、あらためて親友、詩人竹中郁をみると可であろう」とある。今は、つとに有名なお二人の二十代の「みなどの祭り」はいつたいどんなだったろうと思う。

郷土誌の窓

から米騒動を総体的に抱えようとしたものである」とある。

ポートピアには、おわりの頃に一回だけ出かけた。メリケン波止場から船で渡った。船を待つ間、腹の虫がグレーグー鳴き出したので商店を見て歩いていたら本屋で買えない本に会った。赤くて細い腰巻きには『神戸ポートアイランド博覧会記念』と印刷してある。本屋で手に入らないとなると欲しくなる悪癖の持主である僕は、とうとうそれを買ってしまった。『神戸とその周辺の昔話』（一五〇〇円）というものがその本だ。発行所は奈良市の株式会社フジタとなっている。大きさは文庫版ぐらいでハードカバー。内容は、神戸の話が十七話で大半を占めている。あとは宝塚・芦屋・西宮・淡路島・明石・赤穂・姫路と一話ずつ載っているが、粗っぽいダイジェスト版だ。余り感心しないけれど、絵はカラフルで楽しい。

林喜芳さんが昨秋発行された、『わいらの新開地』市に会った。民衆との表裏一体感、それはいとしいような感激である。※

去年末に『九十才の微笑仏——猪名川木喰由来縁起』（三八〇〇円）という本が発行されている。兵庫県民芸協会の刊行で、著者は県立猪名川高校教諭・牧野正恭さん。享保三年（一七一八年）から文化七年（一八一〇年）の間に生きた木喰上人の研究書で、猪名川沿いに、上人の足跡を追った力作。九十才の高齢になって、猪名川城に足を踏み入れた上人の遺跡が一つ一つとりあげられ、解説されている。※

（八〇〇円）という本、神戸らしい温かみのある書名で好感がもてる。わたしでもなく、わしらでもないところが、いかにも神戸らしい。内容にいたっては、『新開地風情』が余すところなく、素晴らしい、柳の葉のような筆で描かれている。五十代以上の人たちには「そやそや、そやつたなあ」と相槌を打たれるところが随所にあることだろう。福原の遊廓のこと、新開地生まれの横溝正史のこと、尾上松之助のこと、新開地まつりのことなど、たくさんの人と出来事を書きながら、その行間には『神戸の根源の姿』、『人間らしい人間と時代』がにじみ出ている。

「あとがき」にはこう書かれている。

『新開地』の雑踏と、いまの『三宮』の混雜とでは人とモノの違いを感じる。温かさと冷たさの差がある。『昔はノンキやつたから……』と言う人もあるが、生きんがための心構えと努力はむかしの方が深刻だった。努力なしでは生きていけなかつた。労働時間は長く、しかも条件は苛酷だった。それに耐えて生きぬいた。それを支えて新開地の映画や寄席があり、大衆食堂があり、安

110号の目次をひろうと、

- 浅田教授に申す（松岡秀夫）
- 幻の四百間溝（岩坂茂止）
- 層塔（丹陽石造物歴遊）（三浦孝一）
- 多可郡北部の神社——天目一神社を中心にして（藤田貞雄）
- 遣隋使はなかつた（古田武彦）
- 隋書卷八十一列傳十三『倭國』
- 『倭國』訳（中島信太郎）
- 山寄上地区的調査（神崎勝）

となつてゐる。地味ではあるが貴重な研究誌である。興味のある方には購読をおすすめしたい。年間会費、送料共二〇〇〇円。

加古川流域史学会が刊行している「季刊・河」が二〇号になった。初めてこの研究誌を受けとつてからもう五年も経つのかと、歳月の早さに驚いてしまう。この研究誌に会つた時、意欲が誌面に感じられたが、その意欲と、地域的なことから僕は先行きを案じたのだが、それは杞憂だったようだ。会を支えている人たちの努力も苦労も一通りではなかつたろうと思う。

海文堂案内版

○法律書・社会科学書・人文科学書・日本文学の棚を拡充します。

○その他、変更点は棚の標示をごらん下さい。

★開店してから一ヶ月と少しの間に、中央公論新人賞を

受賞された高橋洋子さん、作家の足立巻一さん、灰谷健次郎さん、田辺聖子さん、陳舜臣さん、翻訳家の村

松増美さん、小松達也さんのサイン会を開催してまいりました。

二月十三日（土）には、午後二時から三時まで筒井康隆さんのサイン会を予定しています。

★海文堂は二階売場を閉鎖しておりますが、間もなく全

面オーブンする予定です。海のゾーン、理工学書のゾーン、学習参考書のゾーンの営業を開始します。

★海文堂全面オーブンにともない、一階の棚の構成を一部変更します。

○海事書を二階“海の本”ゾーンへ移します。

○岩波書店の本を左奥の位置から、児童書ゾーンの入口に移します。

★ブック・プラザでは、二月十五日まで「筒井康隆コレクション」を開催いたします。

二月十五日からは「岩波文庫・岩波新書フェア」を二月末日まで開催いたします。

★ギャラリーでは、「現本限り本フェア」のあと、お求めやすい価格で、フランスの巨匠ビュッフェのリトグラフを十数点集めた「ベルナール・ビュッフェ展」を開催いたします。くつろいで、ビュッフェの絵をお楽しみいただきたいと思っております。

★当誌の誌名を「読書アラカルテ」から「ブルーアンカー」に変更いたしました。錨をおろして休む、本の港になればという、願いをこめた名前です。